日本旧石器学会
ニュースレター 第41号
NEWS LETTER No.41
JAPANESE PALAEOLITHIC RESEARCH ASSOCIATION

沖縄の化石調査

山崎真治（沖縄更新世人類研究グループ）

沖縄における旧石器時代研究は，近年良好な遺跡と層序に恵まれて，新たな展開を遂げつつある。ここ10年ほどの間に相次いで発掘された白保竿根田原洞穴遺跡（石垣市）やサキタリ洞遺跡（南城市）では，堆積層の精密な調査と分析が実施され，人骨化石だけでなく，遺跡において繰り広げられた人類活動の総合的理解に資する葬送・生活痕跡や文化遺物の検出が相次ぎ，大きな成果をあげている。一方，沖縄の旧石器時代研究は，更新世の動物化石調査を基軸とした第四紀学的研究として進展してきた経緯があり，日本の旧石器時代研究にあって独自の経過をたどってきた。こうした側面については，これまであまり取り上げられる機会がなかったので，本紙面をお借りして筆者の経験を交えつつ，沖縄の化石調査の歩みについて紹介したい。

沖縄では，旧石器人と共存した可能性のある後期更新世の動物化石の産地が多く知られており，早くから調査研究の対象とされてきた。特にリュウキュウジカやリュウキュウムカシキョンを含む絶滅シカ類は，断片的な標本でもそれと識別し易いため，沖縄の化石調査において良い年代的指標となっている。1977年にまとめられた沖縄県内のシカ類化石産地のリストには，93箇所の産地がリストアップされており[1)]，その後に発見された産地も多い。沖縄島南部の糸満市，南城市，八重瀬町では，1977年時点で20箇所の産地が知られていたが，2019年現在，筆者の集計によれば30箇所以上の産地が明らかになっている（図1）。小規模なものまで含めれば，沖縄県全体ではシカ類化石産地の総数は200箇所を上回るのではないだろうか。

シカ類化石が更新世の指標となることは早くから知られていたが，具体的な年代値が与えられたのは1960年代末から1970年代にかけて行われた山下町第一洞穴遺跡（那覇市）や港川遺跡（八重瀬町）の調査以降のことである。このうち前者では層位的発掘が行われ，シカ類化石は主に，32,100 ^{14}C BP（TK-78）の年代値が得られた人骨産出層準（炭化物層）の下位の暗褐色土層から出土することが明らかとなった。一方後者では，グリッド方式にもとづく発掘が行われ，裂罅堆積物の下部からは少量のシカ類化石とイノシシ化石が，上部からは多量のイノシシ化石と人骨が出土することが明らかとなった。人骨産出層準付近で採取された木炭から18,250 ^{14}C BP（TK-99）の年代値が得られており，これが港川人の帰属年代として採用されている。港川遺跡における化石群の産状は，更新世末期にシカ類と交替する形でイノシシが登場すること，そして両者の転換期に人類が登場することを示すものと解釈されてきたが，近年の長谷川善和氏らによるレポート[2)]では，シカ類化石は二次堆積物と判断されており，港川の裂罅堆積物はシカとイノシシの交替期のものではなく，イノシシの出現期に相当するものと再解釈されている。

上述のように，沖縄ではシカ類化石の産地は数多く知られているが，不思議なことにイノシシ化石の産地は極めて乏しく，最小個体数138体にのぼるイノシシ化石が出土した港川遺跡は最大規模の産地で，このほかピンザアブ遺跡（宮古島市）など10箇所ほどの産地が知られているに過ぎない。イノシシとシカ類では，化石群の形成過程や要因をめぐって差異があるのかも知れない。

港川遺跡の調査後，1970年代後半から80年代にかけて，ゴヘズ洞穴遺跡（伊江村）やピンザアブ遺跡（宮古島市），下地原洞穴遺跡（久米島町）といったシカ類化石産地が調査され，人骨化石の発見や放射性炭素年代の蓄積が図られた。しかし，いずれの調査においても化石群の層序的位置づけは不明確であり，ゴヘズ洞穴の調査から加藤晋平氏によって提起された叉状骨器＝非人為説を受けて表面化した人工遺物不在論とともに，その後に引き継がれる大きな課題となっていった。一方奄美では，1987年に相次いで土浜ヤーヤ遺跡や喜子川遺跡におい

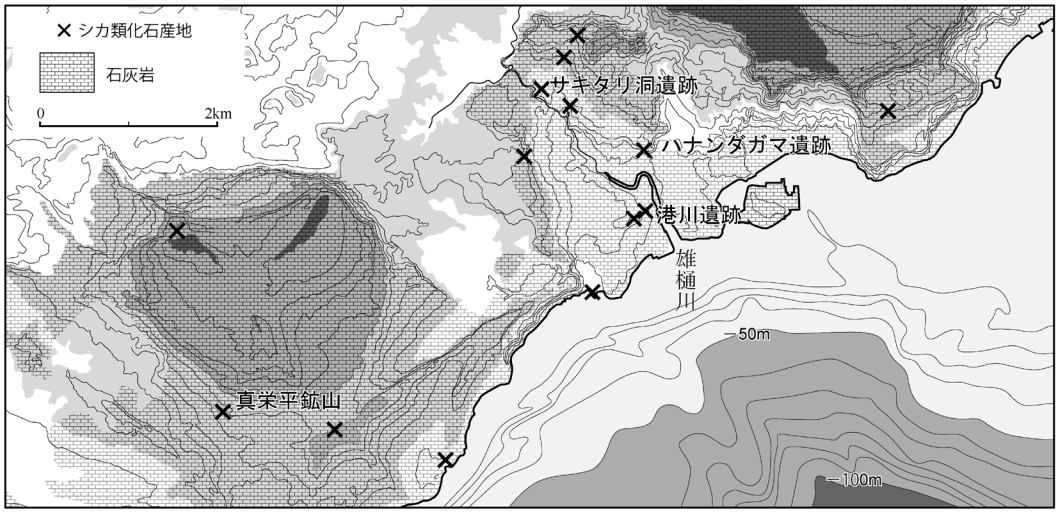

図1　沖縄島南部の化石産地と調査地点の位置

て，縄文時代（貝塚時代前期）の遺物包含層の下位よりチャートや頁岩製の剥片石器群が検出され，これらが旧石器時代のものであることが示された。

この発見を受けて，沖縄でも1990年代以降真正の旧石器を探索する機運が活発化したが，新たな資料の検出には至らなかった。状況に変化が訪れたのは，21世紀に入ってからのことである。2001〜2003年にかけて森田直哉氏（故人）ら宜野湾市教育委員会のメンバーによって行われた嘉数（かかず）テラガマ洞穴遺跡（宜野湾市）の緊急調査[3]では，貝塚時代の遺物包含層の下位よりほぼ解剖学的位置を留めた1個体分のイノシシ化石が検出され，厳密な層序関係は不明ながら，近傍から鍾乳石に被覆された人骨（上腕骨，脛骨）も発見された。イノシシ化石と同層準から採取された木炭からは，16,410 ^{14}C BP（IAAA-30355）の年代値が得られている。この調査は，現代的な考古学的手法にもとづく発掘によって，化石群の層序的位置づけと年代を明らかにしたという点で，重要な意義をもつものであった。

筆者は従来縄文土器の分類を専門としていたが，2006年から沖縄の化石調査に関わるようになった。最初に取り組んだハナンダガマ遺跡（南城市）調査当時は，豊富に産出するシカ類化石の一方で，年代的，考古学的データの不足から，その位置づけは暗中模索の状態であった。各地から出土するシカ類化石がいつ頃のものなのか，イノシシと共存したのかどうか，いつ頃絶滅したのかという基本的なことがわかっていなかったのである。

そうした中，2009年3月に真栄平（まえひら）鉱山（糸満市）において分層可能な裂罅堆積物を調査する機会を得，更新世末の動物相について貴重な知見を得ることができた[4]。ここでは堆積層下部からシカ類やリクガメ類，中部からヤンバルクイナやアマミヤマシギと考えられるトリ類（わずかにシカ類，イノシシを含む），上部からイノシシが産出し（図2），港川遺跡とほぼ同様の動物相の変遷を確認することができた。人骨や石器等の人工遺物は得られていないが，下部採集の陸産貝類（カタツムリ）から19,850 ^{14}C BP(PLD-13880)，上部採集の炭化物から23,140 ^{14}C BP(PLD-13879)の放射性炭素年代値が得られており，イノシシ骨には解体痕と考えられる損傷も認められた。ここから産出したイノシシは現生や貝塚出土のものに比較して顕著に大型であり，これは，従来から知られていた港川遺跡[5]やピンザアブ遺跡出土のイノシシにも共通する特徴であった。以上のことから，シカ類が最も古く，これに大型のイノシシが続き，完新世に入ると小型のイノシシ（リュウキュウイノシシ）が主体となるという，中大型動物相の生層序的関係が示唆された点は大変重要であった（図3）。

こうした知見を踏まえて，2009年11月からはサキタリ洞遺跡の調査に着手し，2010年9月〜11月には沖縄県立埋蔵文化財センターによる白保竿根田原洞穴遺跡の調査が行われた。真栄平鉱山の調査成果から明らかとなった中大型動物相の生層序は，白保竿根田原洞穴遺跡の調査でも堆積層の年代を推定する上で有効な手がかりとなった。また、サキタリ洞遺跡でもこれを支持する層序関係を確認することができた。この間の経緯は別著に詳しい[6]。2011年10月からは，沖縄更新世人類研究グループとして藤田祐樹氏，片桐千亜紀氏，海部陽介氏，大堀晧平氏らと各地での調査研究を実施してきた。3ヵ年

図2　イノシシ化石の産状（真栄平鉱山）

図3　リュウキュウイノシシの大腿骨（左２点）と
真栄平産の後期更新世イノシシ大腿骨（右４点）

にわたり，日本旧石器学会より運営費助成をいただき，カメラケースやヘルメット等を整備できたことは大変有り難いことでした。この場を借りて会員の皆様に厚く御礼申し上げます。

沖縄における後期更新世の動物化石に関する調査研究は，詳細な年代が把握できるサイトが極めて少ないという点で，いまだ十分なものとは言い難い。一方，多くの洞穴や化石産地が知られており，今後の「伸びしろ」は大きいと思われる。

2009年から2013年にかけて宮古島市教育委員会によって発掘が行われたツヅピスキアブ遺跡では，石灰岩洞穴開口部前面のドリーネの堆積物が調査され，近現代の堆積層の下位より1000点以上のイノシシの遊離歯や，ミヤコノロジカの化石が検出された。イノシシ顎骨の放射性炭素年代測定によって8,665 ^{14}C BP(NUTA2-15143)の年代値が得られている。ここでは動物化石とともに，異地性のチャート礫やチャート礫を素材とする剥片・石核が出土しており，チャートは宮古島からは産出しないことから，北方の大神島に分布する大神島層（島尻層群の基底部に相当）に由来するものと考えられている。この遺跡から出土したイノシシ臼歯について検討を行った河村愛氏らは，この遺跡のイノシシはサイズの異なる大小の２グループ（*Sus scrofa* と *Sus* sp.）に分離でき，大型のもの（*Sus scrofa*）は後期更新世の後期に人為的に導入された後，島嶼化（insular dwarfism）によって小型化したもので，小型のもの（*Sus* sp.）は，完新世初頭にやはり人為的に導入されたという解釈を示している[7]。この遺跡では，動物化石包含層の下位にも堆積層が続いており，石器や動物化石は確認されていないが，炭化物から28,000-19,000 ^{14}C BPの年代値が得られている。

沖縄の北に位置する奄美でも，新たな調査が始まっている。2016年から天城（あまぎちょう）町教育委員会によって発掘調査が進められている下原（したばる）洞穴遺跡（徳之島）では，動物骨や海産貝類とともに南島爪形文土器や型式未定の土器群が多く出土しており，多量の磨製石鏃や貝鏃が伴っている。中でも，これまで沖縄・奄美でほとんど類例の知られていなかった磨製石鏃は，遺跡近辺で産出するスレート様の黒色石材を利用した凹基鏃で，身部中央に孔をもつ特徴的な形態を呈する。この種の鏃の対象となったのがいかなる動物であったのか，興味あるところである。2019年3月には草創期の「隆帯文土器」の出土が報じられており[8]，今後の調査の進展が注目される。

註

1）大城逸朗・野原朝秀 1977「琉球列島における鹿化石産出地について」『沖縄県立博物館紀要』3：1-12

2）長谷川善和・鎮西清高・野原朝秀・池谷仙之・和田秀樹・大山盛弘 2017「沖縄の更新世港川人遺跡の地形と地質」『群馬県立自然史博物館研究報告』21：7-18

3）森田直哉編 2005『嘉数テラガマ洞穴遺跡』宜野湾市教育委員会

4）Fujita, M., Yamasaki, S., Sugawara, H., Eda, M.(2014) Body size reduction in wild boar (*Sus scrofa*) from the late Pleistocene Maehira Fissure Site in Okinawa-jima Island, Japan, with relevance to human arrival. Quaternary International 339-340:1-11.

5）長谷川善和・姉崎智子・大山盛弘・松岡廣繁・知念幸子 2018「沖縄県港川人遺跡の哺乳類とくに大型イノシシの形態変化について」『群馬県立自然史博物館研究報告』22：23-49

6）山崎真治 2015『島に生きた旧石器人・沖縄の洞穴遺跡と人骨化石』シリーズ「遺跡を学ぶ」104　新泉社

7）Kawamuram, A., Kawamura, Y., Namiki, M. (2017) Early Holocene wild boar remains from Tsudupisuki-abu Cave on Miyako Island of the Southern Ryukyus, Japan. Quaternary International 455:18-29.

8）南海日日新聞「奄美最古『隆帯文土器』出土　天城町下原洞穴遺跡」（2019年3月16日朝刊）

2019年度　日本旧石器学会 第17回総会・研究発表・シンポジウムについて

2019年6月29日（土）・30日（日）に大正大学（巣鴨キャンパス）において，下記のとおり，日本旧石器学会第17回総会・研究発表・シンポジウムを開催します。

30日（日）に開催するシンポジウムのテーマは，「旧石器研究の理論と方法論の新展開」です。当学会がこのテーマをとりあげたシンポジウムを行うのは初めてです。講演者の皆様からは，考古学研究において理論と方法論がどのような役割をもち，どのような枠組みや視点を提供することができるのかを，理論的研究の動向や旧石器時代を中心とする実践的研究を通じて提示していただきます。続くパネルディスカッションでは，活発な議論が期待されます。

2019年6月29日（土）
会場：大正大学巣鴨キャンパス
（東京都豊島区西巣鴨3-20-1）
総会・研究発表会場：5号館5階551教室

○総会（13：30〜14：30）＊12：30受付開始

○一般研究発表（14：45〜17：30）
・諸星良一「星野遺跡群の調査－チャート原産地遺跡の実存－」
・渡邉　玲・桐原弘亘・中尾綾那・榎本美里・新里亮人・海部陽介・佐野勝宏「徳之島アマングスク遺跡の発掘調査成果」
・鈴木忠司「礫群から何が見えるか」
・市田直一郎「本州最北部における旧石器石材の分布と利用－尻労安部洞窟出土台形石器の分析を中心に－」
・野口　淳・千葉　史・横山　真・神田和彦・渡邉　玲・佐藤祐輔・小菅将夫「後期旧石器時代前半期尖頭形石器の形態測定学－東北地方秋田県域の事例分析－」
・門脇誠二「レヴァント地方の中部旧石器後期〜上部旧石器前期における石器刃部獲得効率の変化とその行動的意義の考察」
・加藤真二「中国山東省の中期旧石器文化」
・橋詰　潤・シェフコムード I. Ya.・内田和典「ロシア連邦アムール川下流域オシノヴァヤレーチカ10遺跡2015年度調査の概要」
・平澤　悠「アラスカ州スワンポイント遺跡における彫器製作技術と石材利用」
＊一件15分（質疑込み，休憩30分）

○懇親会（18：00〜20：00）
＊開始時間は変更になる場合があります。
会場：5号館8階「鴨台食堂（おうだいじきどう）」

2019年6月30日（日）
シンポジウム会場：5号館5階551教室
ポスター会場：5号館5階553教室

○シンポジウム　『旧石器研究の理論と方法論の新展開』（9：00〜15：30）
＊8：30受付開始
・研究企画委員「趣旨説明」
・安斎正人「考古資料から歴史構築へ」
・鈴木美保「刃部磨製石斧の起源-伝播か収斂進化か？」
・五十嵐　彰「旧石器研究における接合の方法論的意義」
・洪　恵媛「旧石器研究をめぐる理論動向の比較：韓国と日本」
・五十嵐ジャンヌ「ヨーロッパ旧石器時代洞窟壁画の研究動向」
・中尾　央「文化進化研究の展開を踏まえた旧石器研究の可能性」
・溝口孝司「ポストプロセスからみた旧石器時代研究への提言」
＊一件25分（質疑込み，休憩15分）
＊発表タイトルは変更になる場合があります。

＜昼食休憩 12：20〜13：50＞
○ポスターセッション・コアタイム（12：30〜13：30）
＊ポスターは30日の受付後に掲示（29日はポスター掲示できません。）
・中沢祐一・直江康雄・坂本尚史「母岩別資料を用いた黒曜石水和層法の知見：旧白滝３遺跡の例」
・髙倉　純「硬質頁岩における微視的製作痕跡」
・夏木大吾「タチカルシュナイ遺跡M-I地点における縄文時代草創期文化の石器製作技術」
・青木要祐・熊谷 誠「北海道タチカルシュナイ第Ⅱ遺跡出土石器の再検討」
・熊谷亮介・梅川隆寛・小野章太郎・鹿又喜隆・佐

久間光平「宮城県薬莱山麓の旧石器時代遺跡群」
・髙屋敷飛鳥「相模野台地における砂川石器群の技術構造と居住形態」
・光石鳴巳・白石　純・森先一貴「兵庫県におけるサヌカイト利用の様相（予察）」
・千葉　史・野口　淳・横山　真・神田和彦・渡邉　玲・佐藤祐輔・小菅将夫「石器の形態測定学的検討のための三次元データ解析法について」
・国武貞克「中央アジア西部におけるEUP石器群の構造」
・内藤裕一・門脇誠二「ガゼルの歯の炭素・酸素同位体比からみたヨルダン・Tor Hamar遺跡における旧石器時代人の狩猟活動」

○パネルディスカッション（13：50～15：00）
シンポジウム報告者全員，司会（研究企画委員）

○講評　阿子島香（15：00～15：15）

○閉会（15：15～15：30）

会場案内
大正大学巣鴨キャンパス
（東京都豊島区西巣鴨3-20-1）
都営地下鉄三田線　西巣鴨駅下車徒歩２分
https://www.tais.ac.jp/utility/access_map/
＊校舎建て替え工事のため，当日は正門が閉鎖されている可能性があります。その場合は，正門から明治通りに沿って池袋方面に50mほど進んだところに設けられた臨時正門からお入りください。

宿泊
宿泊の斡旋はいたしませんので，各自でご手配ください。

参加申込
同封のハガキに必要事項をご記入の上，6月10日までにご投函ください。また，やむをえず総会を欠席される場合は，同ハガキ下段に記載された委任状にご記入・ご捺印の上，ご返送くださいますようお願い申し上げます。会則第5条により，全会員の5分の1以上の出席（委任状を含む）をもって総会が成立します。

アジア旧石器学会（APA）の新執行体制について

APAはロシアのAndrei Krivoshapkin会長による前期執行体制(2017年1月～2018年12月31日)が終了し，2019年1月1日より今期執行体制が発足しました。昨年，アルタイ共和国で開催された第９回APAロシア大会期間中の８月４日に執行会議が開催され新執行体制が決定しました。会議では次のことが決定いたしましたのでご報告いたします。

１．次期（2019年1月1日～2020年12月31日）
APA会長：王 幼平 教授・北京大学考古文博学院（Prof. Wang Youping, School of Archaeology and Museology, Peking University）

２．次回第10回APA大会2020の開催国：中国

３．新名誉会長：高 星　教授・中国科学院古脊椎動物与古人類研究所（Prof. Gao Xing, IVPP）

４．APA加盟国を拡大することが各国代表によって承認され，次の点を確認した。

（１）名誉会長は，創立4カ国からのみ選出される。

（２）中国大会の次は，韓国（2022年），日本（2024年）と創立加盟国が大会を開催し，次いで新加盟国が大会を開催する。

（３）会長は，新加盟国も含め，大会開催国から選出される。

（４）現会長から，マレーシア，タイ，ヴェトナム，フィリピン，インド，インドネシア，モンゴル，イスラエルの8カ国に招待状を出す。

（５）各国の組織単位での加盟を条件とし，対応組織がない国に関してはその設立を促す。

（渉外委員会　出穂雅実）

2018年度第2回普及講演会報告

2019年2月10日(日)に福岡市博物館にて開催した2018年度第2回普及講演会およびデータベース（以下DBと表記）ワークショップ・ミニセッションについて報告します。今回の普及講演会は，前日9日に同会場にて九州で初めてとなる遺跡マッピングパーティーをDB委員会が企画したこともあり，広報委員会とDB委員会が共同で開催する運びとなりました。共催の九州旧石器文化研究会，福岡旧石器文化研究会，島根大学法文学部山陰研究センターには開催案内のポスター・チラシの配布・掲示，広報活動にご配慮頂きました。そして開催にあたりご協力いただいた福岡市博物館市史編さん室の菅波正人氏，またご発表者の方々に感謝申し上げます。

午前中は旧石器時代遺跡DBのワークショップ・ミニセッションとして，「新しい『日本列島の旧石器時代遺跡』データベースがめざすもの」（司会：及川 穣）と題し，光石鳴巳DB委員長に講演頂き，取り組みの目的や意義について説明する中で，地域研究や考古学研究に資する理念について明確に示して頂いた。学会が提供するオープンデータとしてGISや地形図，書誌情報との連携を通じて地域社会への幅広い利用の可能性についても紹介して頂きました。次に，「旧石器時代遺跡データベースとオープンデータ活用の可能性：Web-GISによる利用の観点」として宮崎県庁総合政策部統計調査課の落合謙次氏に登壇頂いた。「ひなたGIS」https://hgis.pref.miyazaki.lg.jp/hinata/という行政を主体とした取り組みをご紹介頂くとともに，社会に公開された様々な統計データや地図情報などを利用する実践の中で，旧石器時代遺跡DBも位置づけて頂き，知的情報の利活用例としてお話された。聴講者の方々には，旧石器研究と現代社会との接点を感じて頂けたように思います。

午後の講演会「福岡の旧石器文化―福岡平野とその周辺―」（司会：岩谷史記氏）では，下記の発表者に登壇頂き，最後にシンポジウムとして意見交換をしてまとめて貰いました。

「開会あいさつ：福岡旧石器文化研究会の活動」
髙橋愼二氏（福岡旧石器文化研究会）
「福岡の旧石器文化―福岡平野とその周辺―」
杉原敏之氏（福岡県教育委員会）
「腰岳黒曜石原産地の様相」

講演風景
（講師は杉原敏之氏）

芝 康次郎氏（奈良文化財研究所）
「雲仙北麓の遺跡群と黒曜石の消費」
辻田直人氏（雲仙市教育委員会）・川道 寛氏（長崎県教育庁新幹線文化財調査事務所）
シンポジウム「福岡の旧石器文化―福岡平野とその周辺―」（司会：松本 茂氏）

はじめに，髙橋氏からは故吉留秀敏氏の地道な基礎研究などを中心に福岡旧石器文化研究会の活動についてご紹介頂きました。そして各発表では福岡を中心とした西北九州を焦点に旧石器文化の特徴が示されました。主に石器の利用石材や特定形態・型式の分布から，遺跡や地域間の繋がりについて示す内容でした。また近年急速に進んだ腰岳黒曜石原産地の悉皆踏査による原産地と遺跡群の認識をはじめ，長崎県埋蔵文化財センターによる各遺跡出土黒曜石製石器の産地判別分析の成果も紹介されました。杉原氏からは，遺跡の少なさや発見のしにくさという制約を横に置きつつも，朝鮮半島からの玄関口であることや，西北九州から各地への移動や物資流通のルートにあたるなど，周辺地域との比較から福岡平野の文化的な特徴について丁寧に紹介されました。一般の方だけでなく，現在の西北九州での最新の研究成果も垣間見える素晴らしい内容でした。

参加者は，午前のDBワークショップ・ミニセッションが57名，午後の普及講演会が95名と大変盛況でした。広報委員会では2018年度，東日本，西日本で1回ずつの普及講演会を開催することができました。取り組みについての良かった部分と反省すべき点を共有し，2019年度の活動に活かして参りたいと思います。

（広報委員会　及川　穣）

関連学会・出版情報

神子柴遺跡発掘60周年記念
シンポジウム「神子柴系石器群：その存在と影響」
開催報告

天竜川に臨む神子柴遺跡に発掘調査のメスが入ったのが1958年，そして昨2018年は60周年という節目の年となった。

その60周年を記念したシンポジウム「神子柴系石器群その存在と影響」が9月29日・30日，長野県伊那市創造館において，同館と八ケ岳旧石器研究グループ，明治大学黒耀石研究センター，上伊那考古学会共催で開催され，台風接近にもかかわらず100名を超す参加者があった。

伊那市創造館は，神子柴遺跡から車で10分の場所にあり，現在国重要文化財である神子柴遺跡の石器全点の公開施設になっている。

プログラムは以下のとおりである。

■　9月29日（土）：シンポジウム基調報告
「神子柴系石器群の石器石材」中村由克
「神子柴集団の石器製作技術」大場正善
「神子柴遺跡再考」栗島義明
「東海地方における非神子柴的世界」池谷信之

■　9月30日（日）：シンポジウム基調報告
「北海道における神子柴系石器群の存在性」中沢祐一
「神子柴遺跡とその石器群」堤　　隆
■　9月30日（日）：シンポジウム記念講演
「神子柴遺跡はなぜ残されたか」佐藤宏之
パネルディスカッション

周知のように神子柴遺跡は未解決の考古学的課題に満ちた石器群である。まずはその石材（中村）や製作技術（大場）が再認識された後，その性格論が検討された（栗島）。また，神子柴とは異なる東海地方の文化様相も紹介された（池谷）。続けて，北海道に神子柴石器群は存在するのかという系統性についても述べられ（中沢），そのベースとなる神子柴本体の様相も再確認された。

神子柴遺跡の性格については，従来，デポ説や住居説などが展開され決着をみていないが，佐藤宏之氏はそれまでスルーだった墓説を掲げ，その可能性を論じた講演を行い，きわめて斬新であった。

そうした多様な視点を踏まえ，30日の午後はパネルディスカッションがなされた。美しい神子柴遺跡の石器全点を目の前に，神子柴系石器群をめぐる活発な議論がなされた2日間であった。

佐藤宏之 東京大学大学院教授の講演風景

なお，当日の予稿集は浅間縄文ミュージアムで扱っている。希望者はjomon@mx2.avis.ne.jpにメールで申し込まれたい。
（A4・50頁・2000円・送料83円）。

（八ケ岳旧石器研究グループ　堤　隆）

刊行のご案内：
『人類と資源環境のダイナミクスⅠ：旧石器時代』
明治大学黒耀石研究センター叢書

本書は明治大学黒耀石研究センターの活動によって得られた研究成果の普及と，大学・大学院教育への活用を目的として企画された「明治大学黒耀石研究センター叢書」の第I巻として出版された。後期旧石器時代の狩猟採集民が，最終氷期と更新世末期の環境変動にいかに適応し，資源の開発と獲得をどのように実現していったか。そのダイナミクスを広原湿原および周辺遺跡での考古・古環境調査に基づく具体的な事例から復元を試みている。

標高1400mの黒曜石原産地群に囲まれた広原湿原とその周辺で，2011年から取り組んできた過去3万年にわたる古気候や植生景観の復元，考古遺跡の発掘調査と出土資料の分析，黒曜石製石器の元素分析など多様なアプローチによって，未解明の研究課題にいかに取り組んだのかを，本書の内容からただようフィールドの土の香りや、野帳の趣とともにお楽しみいただければ幸いである。

さらに本書では，その成果を比較考古学的な観点から位置づけるために試みた中部ヨーロッパの事例との対比，基本的な用語集の整備や，旧石器時代研

究の最新の課題に関するコラムの掲載などによって，興味関心をより深めていただけるような構成を企図した。本書の基本的な情報は以下の通りである。

（橋詰　潤）

体裁：Ａ５版　256頁
発行：雄山閣　2019年２月
執筆：小野　昭（編著）・島田和高・隅田祥光・中村由克・橋詰　潤・吉田明弘
目次：
序 文
はじめに
Ⅰ　自然環境と人類活動
Ⅱ　後期旧石器時代の移り変わりと黒曜石資源の開発
Ⅲ　中部高地の黒曜石原産地周辺における過去3万年間の景観変遷
Ⅳ　中部高地にヒトは何を残したか―広原遺跡群の発掘―
Ⅴ　中部高地でヒトは何をしていたのか―黒曜石原産地分析の活躍―
Ⅵ　気候変動のインパクトと人間適応のダイナミクス
Ⅶ　晩氷期の温暖化と縄文文化への胎動
Ⅷ　中部高地からユーラシアへ

お知らせ

メーリングリストの運用について

日本旧石器学会ではメーリングリストの運用を行っています。これは学会からの連絡手段として利用するとともに，情報交換の場として活用していくために設けたものです。ただ，運用から4 年以上がたちましたがまだ多くの方が未登録のままとなっています。まだ登録していない会員諸氏におかれましてはメーリングリストにご登録ください。メールアドレスを，事務局のメールアドレス（jimu@palaeolithic.jp）までお知らせください。速やかにご利用できるようにします。強制するものではありませんが，ご協力をお願い申し上げます。

会費納入・住所変更手続きのお願い

日本旧石器学会は，皆様の会費によって運営されていますので，会費は原則前納制としております。本ニュースレター同封の払込取扱票を用いて，今年度分会費の納入をお願いします。振込先は，日本旧石器学会　郵便振替番号00180-8-408055です。全国の郵便局で簡単に手続いただけます。これまでにもお知らせしておりますとおり，**2018年度より年会費が6,000 円になりました**。御理解のほどよろしくお願いします。

また，会費滞納は本会運営に大きな支障を招く原因になりますので，同封の会費納入状況を御確認のうえ，2017年度以前の会費を未納の方は，未納分もあわせて納入をお願いいたします。

転居をされた方は，必ず住所変更の手続をお願いいたします。郵便局に転居届を出されていても，本会では郵便局以外の配送会社を利用していますので転送していただけません。会費納入の際に払込取扱票に新住所を記載いただくか，または事務局までメール等で御連絡ください。

日本旧石器学会入会申込み手続きについて

日本旧石器学会入会申込みにつきましては，入会申込書を日本旧石器学会ホームページからダウンロード（http://palaeolithic.jp/join.htm）し，必要事項を記載の上，日本旧石器学会事務局へ郵送してください。入会資格審査にあたっては論文等著作物の提出を求める場合があります。ご協力ください。

日本旧石器学会ニュースレター 第41号
2019年４月26日発行
編集: 日本旧石器学会ニュースレター委員会
橋詰　潤・馬籠亮道・山崎真治
発行: 日本旧石器学会
事務局:〒192-0364
東京都八王子市南大沢1-1
首都大学東京 人文社会学部
人文学科 歴史学・考古学教室気付
E-mail　jimu@palaeolithic.jp
HP http://palaeolithic.jp/index.htm